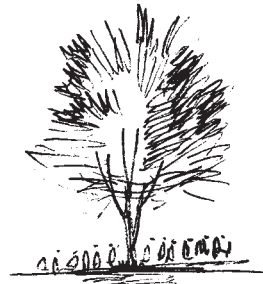


光の子



No.200 2021.5.4

●年間聖句 知る力と見抜く力とを身に着けて、あなた方の愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。

(フィリピの信徒への手紙1章9, 10節より)



「春 陽」

表紙絵・中島由起子

大きな翼

風船を持つなり夢をもつやうに

鳥雲にむかしはワルといふ男

月光は大きな翼抱卵期

両腕に受ける五月の海のいろ

明易し水ほとばしる魚市場

隣子のまたもや喧嘩走り梅雨

梅干して今しあはせと思わねば

奥名 春江（春野主宰）

出会いを感謝して

東埼玉バプテスト教会 木田 智恵子

『光の子』第200号発行、おめでとございます。

まだお目にかかったことのないかたもいらつしやると思

い、最初に自己紹介します。栗橋町（現久喜市）で教会の集会が始まったのは22年前。知人に教えられ、光の子どもの家を訪ねました。13年前に大利根町（現加須市）へ引越した頃から、月に一度夕礼拝に、牧師である夫とともにお邪魔しています。また現在、夫は光の子どもの家の評議員、私は相談委員として関わりのお機会をいただいています。

平日の数日は、県立高校の家庭科非常勤講師をしています。授業では、ひとり親、貧困、虐待、LGBT、ヤングケアラー等々も扱い、考慮の必要な現代です。完全な人間など有り得ないので、どの家庭にも、何らかの課題があると思います。

私自身も小学生のときに、

実母と生き別れ、「捨てられ」体験をしています。弟と共に父に連れられ、祖父母の家で、叔父夫婦や従弟たちと、計9人で暮らしたわずかな思い出もあります。父が再婚し、後に縁組して養母となつた母との葛藤とも呼べる日々も、振り返れば、私の生涯に必要なことだったと確信しています。（十代のうちは、とてもそうは思えませんでした。）

光の子どもの家にいる子どもたちも、数年また十数年という歳月の中で、家族のことで重荷を背負っています。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と、イエス・キリストは言っています。子どもでも、おとなでも、すべてイエス様のところへ行くことができます。

この場所で、聖書の言葉が語られ、祈りのうちに育てられる子どもたちすべてに、神さまのうちにある平安が与えられることを、願ってやみません。

毎年このことではあります、が、この春も、2人の卒園生を祝福のうち

に送り出しました。どこに住むようになったとしても、実家のように帰ってくることで、できる子どもたちは幸いです。来年からは、18歳成年となりますが、高校生たちを見ていると、あらゆる面での自立ができるようになるのは、簡単なことではないようです。いつでも相談できる人が、そこにいます。職員のかたがたを信頼しているからこそ、子どもたちは連絡をしますし、みなさんよく応えておられます。



設立当初からある園庭の枕木、腐食がひどいものを取り除き、使えるものは位置を変え、歩きやすくしました。作業をしていたら、子どもも集まってきました。

私たち夫婦も「信頼できるおとな」でありたいと願っています。子ども時代のある時期を知っている、たまに会う近所のおじちゃん、おばちゃん位の立場でいられたらと思います。ウィズコロナの時代にあつて、今しばらくは、光の子どもの家で一緒に食事をする機会もなく、また、普段はお正月や夏休みに帰ってくる卒園生たちにも会えないのは寂しいですが。

子どもたちの自立を妨げる親の過保護・過干渉（また無

関心・放任)についても、教科書にあります。光の子どもの家ではよく配慮され、どの子どもたちも家のはたらきなどを分担し、責任をよく果たしていると感じます。手を掛け、目を掛けて育てられるというのは、そういうことでしよう。子どもたちを頼もしく思います。

子どもたちの成長を、近くで見たいというのには幸いです。よその家の子どもを叱つたら、その親に睨まれる時代なのかも知れませんが、それは違うのではないのでしょうか。数十年教員をしていると、親の在り方にも変化があると感じていきます。「タテでもヨコでもない、ナナメの関係も大切ですよ。」と、近所のおばちゃんでいたい私は考えます。(ただし、「おばちゃん」と呼ばれたいわけではないことを、お断りしておきます。姪たちは私のことを名前前で呼びます。)これを読んでくださった皆さまも、ご同様ではないでしょうか。

子どもたちにも皆さまにも自由にお目にかかる機会をたのしみに行っています。

感謝

学校法人雲柱社 松沢幼稚園理事長 今関 公雄

「光の子」199号の誌抄に、昨秋の「光の子どもの家」訪問を掲載していただきました。また、「編集委員から」では「光の子」発送作業のことが記載されていました。

これらの事により、創設当時のことが懐かしく回想され一筆する次第です。

私は、1985年の開設から10年間、初代施設長を務めました。当時、東京のT短大保育科の社会福祉担当教師をしていました。当初、つなぎ役のつもりが、結果的には一仕事十年になりました。

その経緯は、大要次になります。「保育科」学生の施設実習先の某養護施設で、何かと意気投合したSさんから唐突な要請がありました。

それは、同志と家庭的養育を目指す新しい「小舎制の児童養護施設」を開設する許可の土壇場で「新しい施設

長」を立てる必要が生じたということでありました。

私は、その志を聞いて「死産には出来ない」との一念でお引き受けた次第です。

施設建設地は田圃の埋立地で、最後の土地購入資金にT短大退職金を投入。その必要額(土地を購入するのに不足していた額)がほぼ同額であった、との奇跡的な出来事からの船出でした。

開設当初、諸事情が重なり地元の猛反対運動が勃発。理解を求めて地元回りに励み、ほぼ1週間に1回の割合で自動車のカソリンを満タンにしたほどもでした。

反対する立場の人々には、それなりの理由があり、分かたせて下さった後には、強力な支援者になって下さるとの貴重な学びもしました。

また、新聞・テレビなどのマスコミで大きく取り上げて

いただきました。お蔭様で、学校時代の同級生、教え子、教会、学校関係などから沢山の支援を戴きました。

なお、当時の施設に対する公費助成は、いわゆる大舎制を基とした人件費算定方式。一方、光の子どもの家は小舎制方式のため定員より多くの職員を配置しました。そのため「人件費が割高」になり赤字決算。この赤字補填のため、年末には寒風の中で街頭募金活動に励みました。

そのような次第で、寄付先を確保するための取り組みも大切になりました。その架け橋の役割を担うものが、機関紙です。「光の子」発送では、妻の友人たちはじめ、多くのボランティアにより「手書きの宛名書き」に励んだことが懐かしく思い起こされます。

「福祉は人なり」と言われます。開設当初から、寝食を共にする親代わりの養育に励んできた同志職員5名が今も勤務しています。そして、ほぼ同数の中堅職員が、その少

年少女時代を第二の実家としての当施設で生活を共にした仲間の育ちの果実であることを思うとき、その存在意義には大きいものがあると考えています。

昨秋の施設訪問は、実に25年ぶりでした。この時間間隔は私自身の諸事情山積の歩みをも反映していま

も印象深く眼に入ったのは北側の木々でした。それは、開設初期にボランティアの人々の協力のもと、苗木を手植えしたものでした。その背丈もぐんと伸びて立派な木に育ち、強力な防風林になっっていることに深い感動を覚えま

した。開設当初、東北地方である青森県出身の職員が、彼の地よりかなり南に位置する北埼玉の当地の方が寒い

です、と言われた言葉を思い起しました。それは、日光降しの雪をさらった寒風が利根川を越えて当施設に吹きさらしになり、体感温度で低く感じる理由によります。

今、開設35周年の歩みを顧みる時、ちよほど防風林の役割のような多くの支援者に支



3月の避難訓練は、消防署立会で消火器の練習をしました。

えられていることを再確認した次第です。当施設を理解し、支援して下さる沢山の皆様に、この紙面をお借りして、改めて心より感謝する次第です。

「光の子どもの家」に連なる皆様の上に、主なる神さまの豊かな祝福を心よりお祈り

申し上げます。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」(新約聖書 ローマの信徒への手紙 8・28)

無胃人の弁

(2) 照る日、曇る日

老健施設紅寿の里 施設長 仙道 富士郎

胃全摘手術を終えて意識が戻ったのは、HCU(和訳で高度治療室と呼び、集中治療室よりも少し重症度の低い患者の治療をするところ)のカーテンで仕切られた空間内であった。最初にカーテン越しに聞こえてきた言葉、「否、珍しいんですけど、良性だったのですよ」、医師同士の話らしい。「やつぱり、そうだったのだ」、私は合点して、また眠りに落ちた。

HCUには一昼夜いたただけで、外科の入院室に戻った。硬膜外麻酔をされているの

で、全く痛みはない。術後2日間はいわゆる点滴だけで体に栄養を入れていたが、3日目からは、それにお粥が加わる。胃を全部取ってしまった人間に対してである。私が実際知っている以前の消化管手術後の経口摂取開始の話は、私が医師インターン生の時のことだから、随分昔のことだが、術後1週間は絶食だったと記憶している。

それにしても、おいしく食べることが出来るのである。主治医に「先生元気ですね」などと云われて、「やはり体

を鍛えてきた甲斐があったか」とほくそ笑んだ。しかし、それも術後5日目までだった。主治医より若い、ベッドに掛かっている、主治医欄に名前の載っている担当の5、6人の医師がやってきて、一番偉そうな医師が、硬膜外麻酔の管を抜いていった。それから地獄だった。全く食欲が消失してしまったのである。それと、すべての臭いが気になりました。ヨードグルトにわずかに入っている人工香料の臭い、はたまた、看護師さんの濃いとも思えない化粧の臭いまで気になりました。すべては、硬膜外麻酔のおかげで、私は天国を彷徨っていただけだったのである。

必死に食べようと頑張るが、頑張れば頑張るほど食事は喉を通らなくなり、主治医は仕方なく、点滴による栄養摂取を主な栄養源に戻さざるを得なくなつた。主治医は申し訳なさそうに「先生ゆつくりやりましょうよ」と言ってくれたが、これくらいのことだと、とても悔しかった。順調にいけば、術後10日ほどで

退院になる予定なのだが、退院は延長になるらしい。

ところがである。8日目にして、猛然と食べ始めた。かなり無理をしたこともあったが、いわゆる完食できるようになった。9日目のグループで、件のグループトップの医師は「明日、退院ですね」と言い放つた。後で、主治医がやってきて「先生大丈夫ですか？」と聞く。大丈夫かどうかは定かではないが、医師の指示だから、退院は決まりである。なんと予定通り、術後10日目での退院とはなつた。

退院後経過順調で万々歳であつたが、そう世の中甘くない様で、術後1か月くらいで、術後補助化学療法なるものが始まつた。

実は、この記事の冒頭の「良性だつた」という医師たちのカーテン越しに聞こえた話は、私のことではなく、誰か違う術後者の話だつたらしいことが、術後の主治医の説明から分かつた。術前のCT、MRIの検査では転移は見つからず、ただ、病変の広がりから胃全摘術が選択され

たのだつた。術式も、最近多く用いられる腹腔鏡下手術だつた。ところが、腹腔鏡を入れてみたところ、癌は胃の外側にも顔を出しており、急遽開腹手術に切り替えられたとのことだつた。だから、現在、私のお腹には、みぞおちの下からお臍までの一直線の切開傷、2か所の腹腔鏡を入れた穴、さらには開腹手術であるから、浸出液が貯留するため、それを体外に除去するためのドレーンと呼ばれる2本の管を通した穴の後が残っている。

組織学検査で、小さいながら2個のリンパ節転移が発見され、私の胃がんの病期はIIbからIIIaにグレードアップしてしまつた。主治医曰く「ステージIIIの化学療法に関しては、最近ST-1（5FUという古くからある抗がん剤に改良を加えたもの）の経口摂取にドセタキシル（イチイ由来の低分子化合物に改良を加

えた抗がん剤）の静脈内投与の併が、効果があるという結果が報告されている。ただ、これは80歳以下の患者のデータであるが——」とのこと。82歳ではあるが、「やつてもらいましょう」と受けて立つたまでは良かった。が、「抗がん剤、なめたらあかんぜ！」の世界で、これが結構きついのである。私の抗がん剤との戦いの日々が始まつた。



年度末で退職する職員をアーチで送り出す。

共育ちカンガルー日記 (59)

ちやんと思春期

近藤 みちる

Kさんは、優希が2歳の頃からずっと個別療育でお世話になってきた心理士の先生で、小学校低学年までは優希も毎週楽しみにKさんの療育室に通っていた。大きくなるにつれスイミングや塾にも通えるようになり、同年代のお友達と交流できる放課後デイサービスが楽しくなってきた最近では、めっきりKさんの療育室から足が遠のいていた。

「来たくなったらまたいつでもおいで」

そう言ってKさんは、あたかも母港の灯台のように、外海に乗り出していった優希の航海を、静かにそっと見守り続けてくれていた。

そんな優希も去年の春、中学生になった。身長も体重も母親の私を追い抜き、口数も減り、態度もどことなくよそよしくなった。

中学でも特別支援級に在籍

することになり、期待と不安に胸を膨らませていた優希だったが、入学後も新型コロナウイルスによる長期休校が続き、実際に学校が始まったのは6月に入つてのことだった。待ちに待った中学校生活だったが、三密回避のため分散登校や短縮授業の措置がとられ、楽しみにしていた行事も全て中止に。それでも優希は、新しい環境に馴染もうと懸命に頑張っていたように思う。

優希の様子が目に見えて変わってきたのは2学期からで、支援級の担任から頻繁に電話がかかってくるようになったのだ。

「朝からエンジンがかからず、午前中いっぱい授業を受けませんでした」「突然行方が分からなくなり大騒ぎで探し出したところ、トイレの掃除用具入れに隠れていました」など。本人に訳を尋ねても口をつぐむばかりで埒が明かな



食堂にひな飾りを出しました。

い。私もつい口調がきつくなり「勉強する気ないの?」「どうして先生を困らせるようなことするの?」などと余計なお小言を言ってしまふ。もつと優希に寄り添って話を聞いてやらねばと思うのだが、頑な優希を前にして、空回りするばかりだった。

その時、ふとKさんのことが頭をよぎった。一度母港に戻って出直してみようかと。久しぶりに療育室を訪れた優希に、Kさんは背くらべをしよう提案した。以前よくやっていた背くらべ。「とうとう優希ちゃんに抜かされ

ちゃったね〜」Kさんは嬉しそうに言った。

療育中、優希が変に私を意識することのないよう、私は外で時間を潰して待つことにした。「今日はとことん優希ちゃんと遊ぼうと思って。トランプで思い切り盛り上がって、すごく楽しかったよ。優希ちゃん、いい笑顔だった」。Kさんがそんな報告をしてくれた。

その後、優希はKさんの療育室に月2回通うようになった。プレイセラピーを軸に、学校の話をしたりパウムテスト（心理検査）をやってみたりと、Kさんなりに優希の心の内を読み解いてくれた。併せて優希の了解の下、学校へ足を運び、先生方の相談にも応じてくれたようだ。ある日、私はKさんに呼ばれた。「パウムテストでね、優希ちゃんに木の絵を描いてもらったの。優希ちゃんの心境が見事に出ていてね。幹が途中から左右真つ二つに枝分かれしていてね。たぶん片方は『社会に求められている外向きの自分』で、もう片方は『本当の内なる自分』なんだ

と思う。あるいは一方が『お父さん』でもう一方が『お母さん』かも。いずれにせよ、同じ意味合いなんだと思うの」。Kさんは続けた。

「優希ちゃんは理解しているんだと思う。社会に向けて先生や親から求められている『あるべき姿』を。そうなりたいし、言われた通りやらなくちゃと思ってる。でも上手く出来ないし、やりたくもない。自信もない。わかっているけど出来ないよ！もう言わないでよ！うるさい！って、そんな絵だった」と。

私はふと、自分の中学時代を思い出した。

「先生も親も煩かったし、反抗ばかりしていたかも。『クソババア！』もよく言っていた」。

そんな私の言葉にKさんはくすりと笑った。

「優希ちゃんはね、ちゃんと優希ちゃんの思春期をやっているの。よくぞここまで育ててくれました、なんだよ。親もよく頑張ったね」。

さてさてそんな優希だが、この春2年生に進級し、下級生ができたとき張り切っていた。

る。パニックも収まり、やれやれといったところ。が、優希のこの「ちゃんと思春期」。我が身を思えば、まだまだ序章なのかもしれない。

セーラーの襟

ひるがへし進級す
みちる

夢

或る時、ちよつとした用事があつて、地元の小学校へ出かけた。

校長室で、若い校長先生とお茶を飲みながら話をしていただのだが、その校長先生は、私が美術教師として勤めていた高校の卒業生とのこと。なので聞いてみた。

「ところで、高校の時、芸術の選択は何を選んだんですか？」と。

あの当時の芸術選択教科は、音楽、美術、書道の3教科から1教科を選ぶことになっていた。

文化系の大学を受験する生徒は、1〜3年の3年間、理系の大学を受験する生徒は1〜2年の2年間芸術教科を

勉強する仕組みになつていました。

彼は「私は美術を選択した」と言った。

「あ、そうなの！ もう少し立派な先生に教われれば良かったね」と答えた。彼が美術をやっていたとは思いつかなかった。何しろかなり昔のこととで、さらに当時は沢山のクラスがあり、複数のクラスの生徒が集まつての授業になる。当時は教え子の名前は覚えていたのかもしれないが、今となるとなかなかそれが難しい……。

ところで、私も含め兄弟姉妹が7人、私の子どもが3人、合計10人がこの小学校を

彫刻家 中島 睦雄

卒業しているのである。現在も形が違えど、この小学校にお世話になっていて。そこで思いついたのだが、子どものブロンズ像を寄贈することにした。

しばらく構想を練ったあげく、知り合いの方の女の子のお孫さんにモデルをお願いして制作することにした。左足を半歩踏み出して、右手を口にあてて「オーイ！」と呼んでいる姿の像である。



像が完成した後、子どもたちへの想いから「夢」という題名も考えたが、当時はその言葉が世の中にあふれていたようで、ありふれた言葉かなと思いついて「夢」は避け、そしてブロンズ像の台座の正面にこのような言葉をはめ込んだ。

遙かな未来に

何かがある

声をかぎりに

呼びかけよう

こだまが きつと

返ってくるから”

このように記しこの像を“こだまの像”と名付けた。

しかしながら、結局、夢を持つて頑張ろう！という意味も込めている。

その後、その校長先生は、この像の写真を名刺くらいの大きさにして、勉強を頑張った子に「こだま賞」としてノートに張り付けてやったのである。

これは、なかなかのおもしろいアイデアである。

「そうだ、又次も頑張ろう。そして2枚目、3枚目ももらいたいな」と思う生徒がいたら、効果があるのでないかと思う。

こちらは何十年にわたり大変お世話になっている小学校に、感謝の気持ちで差し上げたのであったが、具体的に効果をもたらして下さった校長先生のご意志にまたまた感謝である。

これこそ私の「夢」の一つで、彫刻家冥利にも尽きる。

追悼 黛 執さん！

光の子どもの家名誉理事長 菅原 哲男

初めて移り住んだ湯河原町は東京の奥座敷と言われるほどの小さいが、隣の熱海よりも数割高い利用料をおさめさせる、気位の高い温泉街であった。

園長はキリスト教会の牧師であり施設長で養護施設ではたらきについて、フリーハンドで全く自由にさせてくれた。

私はその年の秋に結婚した。

牧師である園長に司式を依頼したが、町には式をする教会がなかった。園長が礼拝している教会とは、養護施設の子どもたちが集まる食堂であった。

園長は町に一つの幼稚園を紹介してくれた。時は、いわゆる政治の色濃くあった季節である。拳式のための打ち合わせが幼稚園長と関わりのある殆ど中年に達した人たちが集まっては政治的な話題が沸

騰するときであった。幼稚園に隣接していた黛家はそんな談義を許してくれる家であった。無遠慮でガサツな私のような者でも喜んで迎え入れてくださり、最も快い時間にしてくださった。

そこで出会った人たちが城山学園後援会を組織して、夏にはバザー、年末年始にはかなり多額の募金を届けてくださるようになるのに時間はかからなかった。

高校進学資金のための小田原駅前での募金活動なども、小田原高校や城内高校の生徒や卒業生などが駆けつけてやってくれた。それらの中心に黛家はいつもあった。

最初でありすべてである子どもたちとの関係形成には直接子どもと暮らしながら、ほとんど毎日のようにやってくる卒園生たちとの付き合いに力があつた。

児童養護施設の暮らしで

は、できるだけ規則を少なくし自由を尊重することに心して関わりを重ねた。暮らしているうちに特に高学年の子どもたちとも関係が深まり、雑魚寝などもできるようになっていった。乱暴で職員たちが逃げ出すほどの中学3年生と、夕食後に彼の部屋にいき彼のそばに寝転んで、何気なく日頃思っていたことを「お前さん、親に会いたいなんて思わないの？」と聞いてしまった。

ややあって地の底から聞こえてくるように低いが鋭く「あんな連中、親でもなければ子でもない、関係ないよ！」と彼が叫んだ。私には、「会いたいよー！親であり僕が子どもなら会いに来てくれるべきだろう！」と抗議するように聞こえた。これには堪えた。児童養護の問題は家族問題であることに気づかせられた瞬間だった。

現今のように潤沢で施設会計の年度決算の繰り越しが通常化している施設の経済では考えられないほど僅少な措置費で、やりくりしていた会計には心強い応援をしてくださ

ったのも篤家が起点だった。だから、家族問題の解決のための取り組みの一つである家庭訪問なども可能にしてくれたのであった。何しろ野犬狩で捕らえた犬の餌代よりも施設の子どもたちの食費が低いと、日頃穏やかな施設長たちと、東京育成園の松島正儀を先

アイドルすぎる

保育士 岩瀬 志穂

私が光の子どもの家に来て、もう十数年の月日が経ちました。

光の子どもの家に来る前は、群馬県の某乳児院で2年働いてました。

さらに遡り、まだ学生の時のことですが、講師として教えに来ていただいたのが当時光の子どもの家施設長だった菅原哲男先生でした。

当時の私は、保育士を目指して保育園や幼稚園の実習に行っていました。が、なんとなくしっくりせず、児童養護施設の実習に行った時に「これ

頭にデモ行進をした時代であったのだから。

後年の光の子どもの家の立ち上げについても、篤家の人々の理解と支援が最大のものであったのである。

篤執さんに心からの感謝と、哀悼の意を表すものであります。 嗚呼。

かな」と思っていたところで菅原先生との出会いだったので益々その方向に考えが向いていったのだろうと思います。

それがきっかけとなり、光の子どもの家の採用試験を受けることになったのですが、そこで色々と「勘違い」があり、もう1つ受けていた乳児院に就職しました。

今思えば、あそこで勘違いがあつて、乳児院に行くことになり、そこで得た沢山の経験は本当に生きていると思います。

乳児が白目になり泡を吹いたり、凄い痙攣や喘息の子、夜間1人での対応等、生死に関わるようなことが自分の目の前で起こり、それらの対応や処置等の経験をすることができたからこそ、スキルも身につけることができ、なにより心が鍛えられたように思えます。光の子どもの家でもなるとかここまで乗り越えてくれたのはそのようなことがあったからだと思います。

本当にどんなことでも経験は自分の糧になると思ったのと、今までをふり返ってみると必要だったことで、必然だったのかなと思えました。

今では、私が最初に担当した子たちは卒園し、それぞれに藻掻きながらも一生懸命に頑張っています。

それぞれの明るい未来を祈っています。

さて、今度は現在私が担当している子どもの話をしたいと思います。

羊子ちゃんですが、今年度小学生となり益々生意気に、おしゃまで、そして何より世渡りが上手な女の子になって

きている印象です。

ある月の誕生会のこと。戦隊ヒーロー物が好きな職員がいて、自分で衣装などを作り、誕生会の出し物としてヒーローショー的なことを行いました。後日、羊子ちゃん含め皆でその話題になったとき、他の子たちは「あれは橋本さんだった」などと言って冷めた感じだったのですが、羊子ちゃんだけは「ちがうよ!!あれはほんものだよ!」「すぐくっかっこよかったよ!」

とまるで本当にヒーローがいることを信じているかのような発言で、出し物をした職員からしてみれば、それこそ百点満点をあげたいだろう発言で喜ばせていました。

ここからが羊子ちゃんの世渡り上手な面が出てくるところです。

そのあとに、コソツと岩崎のところへ行き、こう言うのです。

「ホントはね、羊子しってるの」「中の人は橋本さんだつて」と!!

です。

岩崎いわく「さすがだよね。本当に生まれ持ったアイドルだね。この子は」羊子ちゃんはとつきにそのようなことを考えたうえでの言葉だったのかははっきりしませんが、もしそうだったとしたらある意味これも才能なのではないかとも思いました。

「この子の将来心配だけど、どんなふうになるか楽しみでもあるね」と職員間で話しています。

羊子ちゃんの世渡り上手なエピソードは他にもあります。

羊子ちゃんが幼児の時ですが、地元の赤十字奉仕団による除草で来て下さった方に、初対面にもかかわらず自ら寄つていき、アイドル級の愛想を振りまいていました。その方は今でも羊子ちゃんのことを気に掛けて頻繁に会いに来て下さっています。

社会性というのでしょうか?「人に好かれる」「可愛がられる」ことは生きていく上で大切だとは思いますが、羊子ちゃんの場合は、それが少々過ぎるところもあって、

本人も「私は可愛がられる存在なんだ」という風な捉え方でアイドルのような立ち振る舞いです。彼女が今後どんなふうになっていくのかがとても心配でもあります……。



管理棟の入り口前に、階段と案内板を設置しました。



昨年度は「新型コロナウイルス感染症」の影響により、各学校が休校となり、子どもの居場所が制限されておりました。そんな中でも感染防止対策を取り入れながら支援を行っている団体が沢山あります。

光の子どもの家では、兼ねてより地域に向けてだけでなく「広域的働き」として何ができるかを模索してきました。

そんな折、埼玉県羽生市に

ある「特定非営利活動法人 羽生の杜」様より、光の子どもの家に食材の提供依頼をいただきました。何度か田村事務局長とお話をする機会をいただき、「北埼玉エリア連絡会」(近隣地区で子ども食堂やパントリー活動をしている団体の緩やかな連合体)の会議に参加させていただきました。

連絡会会議で「一般社団法人すくすく広場」様、「加須北子育て応援フードパントリー」様、「子ども食堂」の活

コロナ禍のなかでの出会い フードパントリーの 拠点協力をはじめました」

事務局長 湯澤 有子

動報告をお聞きする中、「光の子どもの家」も地域拠点として応援出来たらと強く感じました。

会議や食材提供の場で「加須北子育て応援フードパントリー」の関根代表から、大利根支部の拠点協力依頼をいただきました。

活動内容といたしましては、支援物資として寄せられた食材・日用品を受け渡しをする大利根支部会場として、「光の子どもの家」地域交流センター」を提供し、食材の引取・配布準備や受け渡しのサポートしております。

大利根地区は現在7家庭の登録があり、奇数月の第3金曜日(午後5時〜7時)に開催しております。

コロナ禍ではありましたが、「北埼玉エリア連絡会」の皆様との出会いに感謝いたします。

フードパントリー・子ども食堂の各団体の皆様に加須市こども局子育て支援課と連携し、子どもたちの暖かい居



場所作りのため活動されています。

フードドライブで集まった食品や企業様からの寄贈、近隣の農家さんからの野菜など沢山の食材等が提供されております。この活動が、食品支援の必要な家庭に届くまでいさわたるよう、社会福祉法人「光の子どもの家」も微力ながら貢献できる協力を続け、ご利用いただく親子に、笑顔あふれる場となるよう支援を続けていければと思います。

*コロナ感染症対策として受け渡し方法を、センター駐車場にてドライブスルー形式で行っております。

日誌抄

2021年1月～3月

【3月末現在の在籍児童数】

幼児 5名 小学生13名
中学生9名 高校生7名
その他1名 計 35名
(二時保護を含む)

【1月】

1日 元旦礼拝 今年は食事
会なし
卒園生も1日に限らず、そ
れぞれ都合のつく日に来訪
子どもと職員で「日帰りス
キー」など小規模な外出
8日 小中学校始業式
12日 職員研修(施設内虐待
防止)
15日 職員礼拝 若月健悟牧
師(守谷教会)
第2回フードパントリー
18日 1月生まれの誕生会
19日 軽自動車1台納車
22日 夕礼拝 木田浩靖牧師
(東埼玉バプテスマ教会)
27日 避難訓練 厨房からの
出火を想定
【2月】
2日 節分 園庭に鬼が来訪
窓から豆を投げる
12日 職員研修 久喜CAP

19日 職員礼拝
22日 2月生まれの誕生会
26日 避難訓練 仙道家から
の出火を想定
夕礼拝

27日 食堂に雛人形を飾る
幼児が「うれしいひな祭り」
を熱唱

【3月】

13日 第126回理事会 来年度
事業計画の確認
出発(たびだち)の会 高
校を卒業した2名がそれぞ
れの道へ
19日 職員礼拝
第3回フードパントリー
22日 3月生まれの誕生会
29日 園庭の桜が満開 お花
見を兼ねたBBQ
避難訓練 佐藤家からの出
火を想定 消防署立ち会い

【寄贈者各位】

RBAインターナショナル
第三企画株式会社 愛足るベ
ジタブル蒲生もいち あゆみ
学園 (株)ありさんプロ (株)石
原商事 五十嵐紀子 市橋智
子 市流 稲塚由美子 太田
百合子 大塚東一 カーブス
大利根店 カーブス古河下辺
見店 カーブス古河三和店

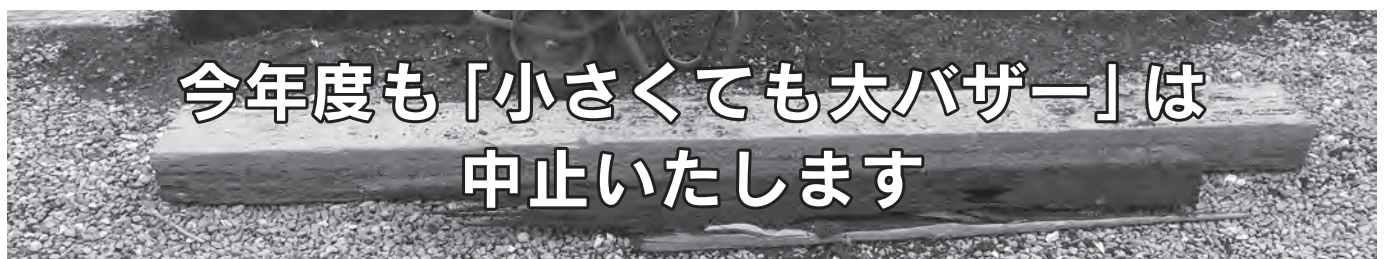
カーブス古河本町店 (有)川島
工業 (株)栗原造園 (株)ケイ
ジェイシー 子育て応援フー
ドパントリー加須北支部 小
林幸子 櫻井秀夫 佐藤協子
(学)実践学園理事長内藤彰伸
清水亨桐 新村文字 東京家
政大学子ども学部子ども支援
学科 (株)テイ・エスロジス
ティクス澤田雅史 寺島宏
(学)東京家政大学 中島みはる
(株)なとり 丹羽吉康 ネパ
リ・バザーロ (株)ハーベス
ふじっ子(株)関東工場 (株)藤沼
畜産 (有)マルキチ物産 マル
ハン古河店 吉羽良美 立正
佼成会古河教会 (株)ワイテイ
ーエス 渡辺千紘 他多数の
皆様 (敬称略)

【ボランティア各位】

〈華道〉岡本有代
〈手芸〉山田智 山田裕子
〈学習〉加藤瑠海 常松洋介
他多数の皆様 (敬称略)

【お願い】

毎年園庭に出している鯉の
ぼりですが、先端につける矢
車が、長年の使用で劣化・故
障してしまいました。ご提供
下さる方はこちらご連絡下さい。



今年度も「小さくても大バザー」は
中止いたします

【発行】社会福祉法人 光の子どもの家 【住所】〒349-1155 埼玉県加須市砂原277-3
【電話】0480-72-3883 【FAX】0480-72-6649 【メール】hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp
【Webサイト】http://www.hikarinokodomonoie.com/ 【振替】00130-1-128022
【印刷】(株)エル・アートデザイン